はなみずき

1990 No.2

発　行＝1990年3月1日
和光高等学校同窓会
東京都町田市真光寺町1291
〒194-01　☎0427(34)3403
発行人＝西尾栄男

和光高等学校同窓会報

知的好奇心を失なわず

校長　丸木政臣

朝、散歩していて気づくことだが、近頃はいろんな種類の仔犬のペットを連れているひとが多い。いわゆるペットブームというのだろうか。私の近所はどこもペットを飼っているので、ペットがいないとなにかはずかしいようでもある。いろんな情報誌によると、日本のペットブームというのは異常らしく、欧米でもこんなブームはないとのこと。これも金余り大国日本の異常現象ということになろうか。テレビを見ていたら外人タレントが、「ペットというけど、日本人には本当の動物愛はないとおもうな、日本人は独り立ちがよわいからペットを自分の分身に仕立ててかわいがっているので、本当のペット飼育とはちがうよ」といっていた。ひょっとしたらこの意見はあたっているかもしれない。日本の男（最近は女も）は自分の属する会社に絶対随順、献身する。時任三郎のうたうCM「二十四時間たたかえますか――」というような企業人である。全く独立した人格がない。男も女もそうなるとペットを自分の分身に仕立ててかわいがり、撫でまわすことになる。なかには子どもは親の人格とは別ものであるはずなのに、親の思いどおりに「あなたの将来を思うからこそよ」と、おためごかしに自分たちの自由に操作しようというひとたちもふえてくる。ペットの肩がわりだから子どもは過干渉で自立性が育たないはずである。

子どものことをあれこれいうひとが多いが、いまはわれわれ大人が変革しなくてはならないときではなかろうか。ペットやわが子や金儲けだけにとらわれるのでなく、少しちがった視点で物を見るようにならなければと思うのである。「知的好奇心」とでもいったらいいのか。儲けや報酬に関係なく、自分の周りに刻々ひらける事態に人間的関心をもちたいものである。九〇年代の初めにあたり、老骨もこんなことを考えているのである。

同窓会の発展をねがう

副校長（主事）　小林功長

長い間の懸案だった名簿が完成して嬉しい。私も、少し手伝ったが、何といっても、名簿の完成は中心になって頑張った委員の力によるところが大きく、感謝の想いである。

第一回の八名から、第三十七回の六クラスの二五一名まで、それは、三十九年の和光高校の歴史でもあるわけで、小学生と一緒の運動会をした世田谷時代の初期のこと、学園紛争の頃、金井校舎の時代のことなど走馬灯のように想い出される。楽しかったこともあるし、辛かったこともある。

名簿を手にした皆さんはどうだろう。さまざまな高校時代であったと思うし、楽しいことも、辛いこともあったことだろう。そして、いずれにしても、その青春を活動の源として、それをのりこえて、それぞれに人生を歩まれているに違いない。同窓会というのは懐かしい言葉だが、それがある清々しさを持っているのは、ただ懐かしむのではなく、苦闘した共通の青春の想い出を明日への活動力とするからでなはないか。そんなことを考えたりしている。それぞれの違いを確認しながら、同窓の人たちが共通の言葉を持つことは素晴らしいことだし、この名簿を機に同窓会が発展することを期待している。交流の輪を拡げて欲しい。

実は、高校の名簿を機に中学の名簿も作ることになって手伝っているのだが、和光学園は、戦後一九四五年から三年間高等女学校を併設しており、一九四八年に一回だけ八名の卒業生を出している。和光中学、高校の前身でもあるし、この方々の名簿を復元したいと思っているが、何分にも古いことで、ようやく二名の方とお話しできたところである。当時のことで手掛りになることがあれば、ご連絡頂きたいと思っている。

ご寄付ありがとうございます

前号の「はなみずき」でお願いした名簿の寄附に早速、たくさんの方からご協力頂き、ありがとうございました。一月二五日現在で

寄附者　三四二名
寄附額　一三六、二万円

となっています。中には、三〇口という方もあり、先輩の方々のご協力に事務局一同感激しております。寄附された方々の氏名は左記のとおりです。

なお、まだ、ご応募されていない方は、できれば、趣旨をご理解頂き、ご協力下さるようお願い致します。「はなみずき」一号に書きましたが、この寄附金は名簿資金の一助に三六回生以前の卒業生を対象に一口二千円として行っているものです。振込は左記へ。

東京0-412865
和光高等学校同窓会

●寄附者一覧

回　組　氏　名（敬称略）

1－1　岩花照子、真藤達美
2－1　宇佐美昇三
4－1　高島文子
5－1　原　和正
6－1　小室京子
7－1　阿部光樹、永峯文子、長部慧、木村加代子、小崎紀子、森　紀子、村上嘉子

8−1 西尾栄男、田中ソノ
9−1 中島康雄、川口恒子、NORIKO KEISER、石塚治子、SACI HIKO EGAN、三輪良子、土肥暁美、小畑紀子、紺谷公子、鷲谷千栄子
9−2 岸 康郎、黒川経子、平井芙由子、黒川敦子、日暮万里子、吉野順子
10−1 伊藤義昭、野口秀敏、山田勲、森島和子、原田 愛、川橋真理子
10−2 箱崎太司雄、小島洋子、竹原絢子
11−1 本田幸仁
11−2 横関洋子
12−1 東房典子、山田圭子、大畠とし子
12−2 平塚訓子、大石比佐子、清田洋子、榊原愛子、永嶋悦子
13−1 片岡義彦、水村摂子、越川ゆかり、雀部久美子
13−2 久間木素子、山室容子、宮崎潔子、山本陽子、佐野和子、尾島安佐子
13−3 河原早苗、寺尾美枝子、鈴木美知子
14−1 飯田良雄、鳥沢玉蘭、川内哲代
14−2 有田数明、市田滋郎、前田美恵子、緒方雪子、渡辺路子、角田美智子、本名敏子
14−3 古手川道比古、中島和男、丸山加寿恵、田中由美子、小菅恵子
15−1 桜岡 寛、金次滋子、岩城紀代子
15−2 今吉洋幸、山口三雄、竹内峰子
15−3 杉本恵美子、老沼恵美子、長井信子
15−4 立川啓子
小沢朱美、高田光子、内田恵子、片山マリ子

16−1 古屋美知子、畠山智子、梶谷実恵子
16−2 斉藤光子、坂井由美子、竹下晶子、二宮里美
16−3 土橋みどり、小林やす子、北村紀子、柳本顕子、大野雅子
16−4 宮本有三、萩原 薫、富沢裕子、森嶋陽子
17−1 町田 忍、野呂真理子、大和田和美
17−2 川瀬君代、羽田礼子、鈴木ゆう子、岩田一友、岡 康雄、五代儀明美、中村さち子、田村由紀代、林みどり、寺尾 幸
17−3 鈴木恭枝
17−4 大久保利克、加藤邦夫、盛合富雄、山北裕雄、太田知子、春田美知子、尾平あき子
18−1 石坂久美子、林 玲子、中嶋美鈴、鳴本はるみ、宮崎道子
18−2 堂園清富
18−4 中山治生、舟越 桂、岩田清子、舟越千恵子、池田真知子
19−1 竹内 勉
19−2 河野 忠、鈴木建樹、上野美佐子、山本一美、森田利子
19−3 大西育恵、原沢陽子、高島佐和子、竹尾伸子
20−1 福田光真
20−2 津田 孝
20−3 斉藤 斉
21−1 吉野輝雄、本間みゆき、渡辺淑子
21−2 荒巻晃江
21−3 太田 真、熊坂良一、榊原健太郎、長谷尾安俊、渡会 裕、緒方由里子、高梨さゆみ

22−1 瀬戸 豊、高木浩介、堀口由美、大田雅子、小笠原みさき、坪内貴子、村田美津子
22−2 長谷川智、土方 豊、臼倉登志子、中島三香、福村祐子、渡辺理恵
22−3 森川美也子、竹内幸子
23−1 池川陽子、毛利千秋、高塚潤子
23−2 川村信一
23−3 黒田朋子、並木明美、松本佳江、菊地陽子、近沢あかね
24−1 赤間正之、高岡精司、平田耕基、梅原久代、向 玲子、伊澤弘子
24−2 大島 久、山田 亘、近藤典子、武田 南、金 ナエ
25−1 小田島 豊
25−2 原島哲二、小谷純子、中澤紀子、細野由美、森谷なおみ
25−3 関根洋一、坂元敦子、中井あさ子、後藤紀久子
26−1 竹内治夫、寺内太郎、西山美子
26−2 五十部鋭利、伊部真里、鈴木なおみ、佐藤 緑
26−3 西山 宏、鈴木暁子、高橋音羽、江戸郁子
27−1 雲雀賀津子、横田良子、高橋佳代子、ERIKO M. BOCK
27−2 坪内泰充、長谷川由理子
27−3 酒井恭子
28−1 水上芳昌
28−2 明智えり
28−4 内藤泰彦、松田善彦、白石正子、細住文子、羽金かおり

28−5 飯山勝彦、松井泰頼、森田純一郎、矢沢太郎、圷ゆう子
28−6 赤沢 裕、岩田洋子、金井久美子
29−2 小林美和、玉田彌奈
29−3 玉田鉄郎、志村幸子
29−4 鳴海裕子、渡辺涼子
29−6 飯村東毅、小畑雄嗣、松本千夏
30−1 熊沢京子、吉田麻乃
30−2 坂元真里
30−3 北原伸剛、高橋武馬、豊田 均、永田久恵
30−4 三井美穂
30−5 小野智子、千葉ちあき
30−6 浅見慈一、鈴木裕子、西澤朱美、二瓶祐子、藤川久美
30−7 浜田弓子、百瀬千波
31−1 坪内通夫、丸田祥三、小池真州美、清みさ子、田村千枝子
31−3 石川智恵子
31−4 黒川彰久、宮入由起子、安永りか
31−5 藤島 深、朝倉紀久子、小澤聖子、真田 薫、内藤理恵
31−6 小松譲治
32−1 朝倉淑江
32−2 栗生憲一、山之口真理
32−3 建石由美、森かんな
32−4 富田 岳、冨矢映史、味澤めぐみ
32−5 小林晶子、古郡康子、三村佳子
32−6 田中 衆、宮崎尚子、森下明子
33−1 小河美子、中村祐子
33−2 志村照一郎、田所治人、斉藤 恵
33−3 大上博史
33−4 田口泰一、弘末かおり

33－6　今西真穂路、大神浩子、小河麻子
34－1　松本純也、植木朗子
34－2　田崎拓也
34－3　渡辺忠生、石川直子
34－4　一戸裕資、若月　亨
34－5　城所華子、菅谷由芳子、中嶋桃子
34－6　北村信行
34－7　新井真琴、安斎幸恵、広瀬　薫
35－1　伊藤優扶美
35－3　宇田共範、金杉和宏、川端秀孝、真崎　啓
35－4　古賀　毅、田口人生
35－5　朝枝浩毅、八村大輔、松本和美
36－1　蜂須賀　歩、藤本　舞
36－2　中道友子
36－3　座間　勉
36－6　新野知明、加藤千恵
37－1　田代達哉、古屋　博
37－2　田崎真也、山本麻実子
37－3　濱津宗聡
37－4　髙尾　史
37－5　石塚有生子
教職員　佐久間信子

和光高校同窓会会計監査報告

一九八九年度和光高校同窓会会計の決算に関する監査結果を左記のとおり報告致します。

記

監査日時　一九九〇年二月二日
監査項目　金銭出納帳、収支計算書、領収書綴、銀行預金通帳
　　郵便局払込通知票綴
　　帳簿、徴憑類の記帳は正確であった
監査結果　特になし
付則意見　なし

和光高校同窓会会計監査委員
小林ルリ子
真藤　達美

和光高校同窓会会長殿

和光高校同窓会会計報告
(1988.11.5～1990.1.31)

高校同窓会担当
岸本博子

Ⅰ．収入の部		
1．繰り入れ金	4,884,686	円
2．1989年3月入金 (10,000×249)	2,490,000	円
3．卒業生名簿収入 (2,000×678)	1,356,000	円
4．定期解約利子等雑収入	531,693	円
収入合計	9,262,379	円
Ⅱ．支出の部		
1．卒業生名簿印刷代	5,714,003	円
2．卒業生名簿送料	1,500,618	円
3．総会開催費	120,000	円
4．名簿作成委員会会合費	44,800	円
5．切手代	121,211	円
6．電話代	6,750	円
7．文化祭菓子代	20,000	円
支出合計	7,527,382	円
Ⅲ．差引残高	1,734,997	円

以上の通り報告致します。

学園だより

●人事移動

一九八九年度は、長らく高校で中心者の一人として活躍された村瀬先生がお辞めになり、体育教師として、若い堀田先生が着任し、また、古谷容子先生が中学に移り、中学から高橋康先生を迎えてのスタートでした。村瀬先生は研究者としての人生を歩むということでのご転職で、性教育研究会の中心として活躍されるとともに、一橋大学、津田塾大学等で教えられています。

また、三月には、谷岡みち、中西達雄両先生が停年退職されます。両先生の、永年にわたる和光の教育へのご尽力に、心からお礼を申し上げる次第です。卒業の皆さんも、たくさんの想い出があることと思います。

●クラブ

小林寺拳法部が、全国大会（新潟）に出場しました。最近やゝ低迷気味の和光のクラブの中で、顧問北山秀樹先生を先頭に、連日熱心に練習に励み、その甲斐あって、関東大会で沼尻有希・野沢晶組が4位、川瀬祐子・森川裕子組が6位で全国大会出場権を獲得し、八月二四日新潟の全国大会に出場しました。全国大会では惜しくも入賞出来ませんでしたが、また、来年を期して頑張っています。

また、陸上競技部では、村田啓祐君（三年）が四〇〇米障害、佐藤剛君（三年）が走高跳で都大会に出場しました。入賞は出来ませんでしたが、久々の都大会出場で、来年に期待したいところです。

●行事予定

1990年度の主な行事予定は次のとおりです。

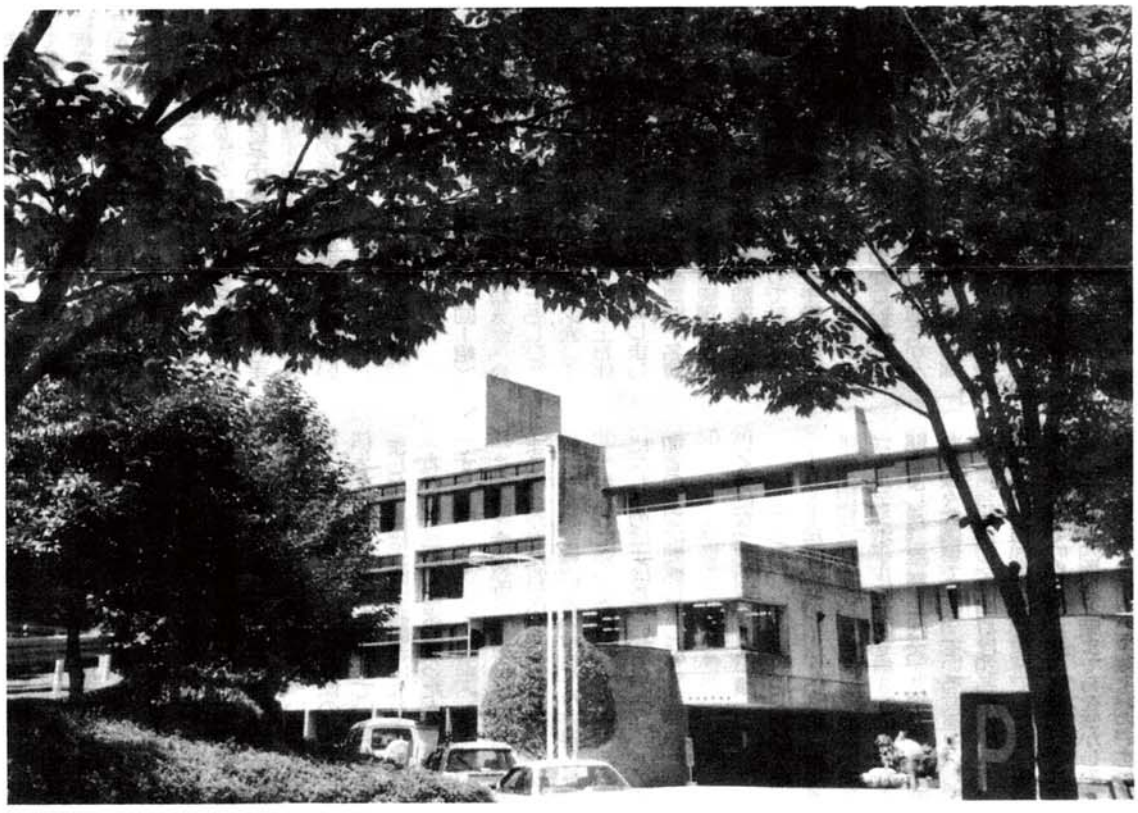
体育祭　5月16日（水）――19日（土）
（雨天順延）
キャンプ　7月21日（土）――25日（水）
研究旅行　10月17日（水）――20日（土）
文化祭　11月3日（土）――4日（日）
卒業生の演奏を聴く会　91年1月

●卒業生の演奏を聴く会

「卒業生の演奏を聴く会」という会があるのを御存知でしょうか。学校と生徒会共催というかたちで行われて、この一月十七日、第七回目を終えました。

この企画は、在校生の活性化のために、いろいろな行事を企画・運営させようということからスタートしたものです。卒業生のいろいろの面での活動の様子を知り、生き方にふれながら、自分達の有り様も考えようというものです。出演者は主にその時々の音楽大学等に学んでいる人達が中心です。在校生にとっては近い学年の卒業生の方が身近だということもあり、又、教育実習で母校に来たメンバーが演奏するということもあり、音大生中心でしたが、時々大先輩にも参加をお願いして色彩りを添えてもらっています。これまで作曲家の三枝成章さんにはお忙しい中たびたび作品紹介や指揮・指導をお願いしてきました。

第二回目までは成城の砧区民会館でした



が、第三回目からは、現在の高校に近い、新百合ヶ丘駅前の麻生市民館大ホールで行っています。

先にのべました様に、音大等の在学生が中心ということもあり、まだまだ音楽的に不十分な点もありますが、内容は次第に整ってきております。

丸木校長、小林主事はじめ先生方も多く聴きにこられます。会が終わってささやかな懇談会も行っています。

こうした会の準備をしたり、演奏を聴く中から、卒業生にふれ、音楽の道に進む人達が毎年何人か出ていますし、担任の先生方にとっては、それぞれにたくましく、その道に励んでいる様を見ることが出来るのも年に一度のうれしさでもあります。

クラス会だより

セピア色から原色に

李　菊子（第9回1組）

新しい卒業生名簿が昨年できて、連絡もとりやすくなったのを機会に、第九回生合同クラス会を、七月十五日小林先生、和田先生をお招きして、新宿センチュリーホテルで開催致しました。卒業後初めて参席なさった方々、会の盛り上げ上手な面々を含めて三十数名が集いました。初めは誰れだかなかなか判明できない彼や彼女とも、顔を見つめ二言三言交わすうちに、二十八年前のセピア色が次第に原色にもどってくるような気が致しました。私たち九回生から和光高校も二クラスになったものですから、あの当時は恋に花も咲いた様でした。恋した彼女は嫩もうっすらおばあちゃん。あこがれの君も前頭薄くなり、白髪もチラチラと見られました。そしてひとりひとりの現状報告や、これからこんな風に…との抱負や、両陣営の選挙のお願いやら（参議院選挙前）ほんとうに高校生当時のめまぐるしい転回でした。

美しい多彩な料理も飲物も充分に用意されておりましたし、さらに二次会三次会へと場所を移して、翌日になったとか――。一年おきにクラス会を、という話もでて来年の幹事は、館田徹さん、石塚治子（出野）さん、一條国宏さん、日暮万里子（山脇）さんにお願いすることになりました。これからも横の繋がりを密にし途中退学した和光っ子にも連絡をとりあって欲しいものです。そして来年の合同クラス会を楽しみにしております。

三年連続のクラス会

羽田礼子（第17回1組）

クラス会の中では活発に連絡を取り合っているのではないかと自負している私達十七回生は、昨年十一月十八日に同窓会を行いました。三年続いての今回は、三十数名の仲間が集まり、先生方にお忙しい中を、小林先生、葛西先生、野倉先生、伊藤先生、奥村先生にご出席戴きました。

「やあ」「お久しぶり」と声をかけ合った瞬間から高校時代の思い出話や現在の仕事のこと、家庭のこと、子供の受験のこと（もうそんな年!?）…と、いろいろな話に花が咲き、賑やかに楽しいひと時を過ごしました。

また、同窓会とは別に、十七回生の女子有志で始めた『女さかりの作品展』も、一昨年に続き昨年十一月に『また、また女さかりの作品展』を開催しました。（十一月十六日～十一月二十一日、経堂のギャルリ玄）

「何か楽しいことをしよう、そして友達の輪を広げていこう」と、同窓会を機に始めた会ですが、着実にその輪が広がりつつあります。今年も開催する予定でおりますので、その節には同窓生の皆様にも是非ご覧戴きたいと思っております。

10年ぶりのクラス会

池川陽子（第23回1組）

「お久しぶり！」「変わらないねぇ」「会いたかったねぇ」と続々新宿の『ともしび』に元高校生たちが顔をそろえたクラス会。1989年の10月のある日曜日、10年以上お休みしていたクラス会を、ついに開催しました。みんなで集まりたいねという声が、名簿作成を通して、だんだんと強まり実現しました。約25名の人が、担任の村瀬幸浩先生を囲んでのひととき、本当に久しぶりで話もはずみ、歌も歌って、笑って笑って、午後1時からなんと最後までいた人は、夜の10時近くまで、近況報告から始まり、なつかしい話しに花が咲きました。みんなそれぞれの道をがんばっているんだなぁとうれしく、そして力強く思いました。何年後かに又会おう、その時はまだ連絡のとれていない何人かの人たちにも会えるといいなぁと話しながら、別れました。

次回は学年同窓会を――27回3組――

地井　衣（担任）

暮れもおしつまった十二月十八日、第27回3組のクラス会が開かれました。他のクラスの人も出席して十五名ほど集まりました。卒業後はじめて出席の方もありました。正式の幹事さんが出産されたりして、二、三名の有志が計画してくれた会です。会場は同じ学年の二組の酒井くんの経営する「いちまる」。コンピューターやワープロ関係の仕事をしている人が多く、時代を反映しているなと思いました。会は十時頃お開きになりましたが、それから十二時すぎまで残った人もいたようです。

この会をきっかけに、その後も、旧友が集まる機会がもたれているとのことです。学年同窓会を開きたいとの声も上がりました。「十年ぶりに会っても昔のように親しく仲間になれるのはすばらしいことです。」との参加者の感想に同感しました。

いくつになっても変わらない顔

波多野　聡（30回2組）

1981年度卒業の私達3年2組（海部重美先生担任）は、昨年6月3日に渋谷の東急ゴールデンホールに於いて第3回の同窓会を開きました。卒業してはや9年の歳月が流れ、様々な職場で頑張っている友達と久し振りに再会しました。当日は20名弱の出席で、残念ながら海部先生はご欠席でしたが、皆当時のあだなで呼び合い、食事さえ忘れて二次会、三次会、四次会と朝まで昔を懐かしみ語り合いました（というと体裁よいのですが単

にさわぎまくっただけ）。高校時代の顔というのは、もういくつになっても変わらないのだなあ、とつくづく感じました。

当時の3―2は、2年生から二年連続して和光祭にクラスで映画を制作したり、結構まとまったクラスだったと記憶しています。卒業後は、とかく消息不明になりがちな連絡等を毎年、中村隆文君が全て行ってくれているおかげで横のつながりも保たれているようです。

卒業後、大切なクラスメイトである、下野高則君の早すぎる死に、大変なショックを受けた時もありました。今では、楽しい思い出と共にみんなの心の中に生きています。

平成2年。今、私達は27歳を迎えます。結婚という文字が気になりだし、既に結婚している仲間をみながら我を振り返る今日この頃です。いつの日にもまた気軽に集えるような和光時代の友人達を、大切にして行きたいと思っています。

〔附記〕

この他に、随想をお載せした「生きてる会」（4回）、30回3組、31回6組から、クラス会を開いたというお知らせを頂戴しました。

（事務局）

近況・随想

「生きてる会」とはなんぞや

石合忠靖（4回）

某月某日、さるところに、「昭和三十一年に高校を出た連中は、〝生きてる会〟とかいうケッタイな同級会を毎年欠かさず開いているそうだね。和光の卒業生の中で、定期的に集まっている奇特な連中は恐らく君たちだけだろう。ぜひ紹介してみたいものだね。ほかの卒業生の励みにもなると思うんだ」――といった話が小林功長先生から舞い込んできた。

さてさて、つらつら「生きてる会」はどうして生まれたんだろう。アバウトの線でいくとこういう次第です。――

「生きてる会」は、担任だった小菅茂雄先生を囲む会をやろうよ、という吉竹の発案で始まった。いつの頃だったか定かではないが、早や三十年近くも前のことである。それが十年ほど前から年一回の集まりに定着した。先生の奥さまにも必ず来ていただいている。かってぼくらの女神的存在であった奥さまは、あの紀子さまの伯母さまである。小菅先生が天皇家のご親戚筋になるなどという奇想天外なことをだれが想像しただろう。昨年暮れの会で、ぼくらは率直にお喜びを申し上げた。先生は、モノ好きな見物人が覗き込むので日課となっていた裸の体操を中止せざるを得なくなった、とボヤいておられた（ついでにいえば、大きなオナラもできなくなったのではないかとぼくらは悲しむ）。ぼくたちはこうした気の置けない『小さな話題』が大好きだ。その中から、さっぱり進歩がないけれども、ちっとも変わっていない自分たちを〝鋭く〟感じ取って安心する。悪くいえばマスターベーションですが、良くいえばアイデンティティですナ。それでいいではないかと、ぼく自身は思っている。

ところで「生きてる会」の紹介文を書くとすれば、本当は吉竹か桝谷が最適任者である。どういうわけか、本当は反対なのだけど、ぼく（石合）はヒマそうに見えて、お鉢が回ってきた。一杯飲ませてもらってヨシとするか…でもぼくはアル中じゃありません。さて本題に戻って、この二人組がいなかったら「生きてる会」は間違いなく存在しない。これだけは、頭のボンヤリしているぼくでもはっきりしている。「また〝生きてる会〟をやるからな」と桝谷から連絡があると、その他大勢（といっても総勢十六名中の七、八人ですが）ノコノコ出掛けていく気楽な会である。あることが持続するには、必ず縁の下の力持ち的な推進者が居る。先頃の会に久し振りに現れた野村（ノムチン）が「ほかの連中はなにしてんだ」と一喝した。いかにも彼らしい。言うことは確かに正論だ。しかし、ずっと会を開き続けるなどという芸当は、この二人以外にはちょっと無理だろう。念のため付け加えると、「生きてる会」という若気の至り的な名前を付けたのも二人のうちのどちらかではないだろうか（頼りないね）。このドライな会名には、なんとなくぼくたちが青春を通過した三十数年前の「太陽の季節」の懐かしいカオリがある。「生きてる会」には「活きてるかい」のニュアンスが込められている。

小菅先生は会のたびに、「オー、生きてるか！元気でやってるか！」と声を掛けてくださる。ぼくたちはその明るい声に接するために行くようなものだが、同時に、本当に生き生きと毎日を過ごしているかどうかの貴重な半生の機会になっている。よく続くものだといわれる集まりもいったんなくなってしまえば幻だ。とにかく末永く続けたいというのが『永久幹事』はじめ一同の気持ちである。…というわけでジ・エンドですが、なんと、またまた始まり…エッ、なんだって!?一部訂正があることが分かりました。桝谷「〝生きてる会〟という名前の由来だけど、命名者は山本（高島）さんではないかと思う。彼女が小菅先生のところに電話すると『生きてるかい』と必ずいわれた。それで〝生きてる会〟にしたような気がするのだけどねえ…」。石合「ナニナニ、そういうことだったの、そういう話は早くしてくれなくては困るではないですか」――皆さん、アルコールのせいでなんだかわけがわからなくなってきました。では、またの機会に、ご機嫌よう。

スリランカの子どもたちとともに

久保田史子（9回2組）

一九八九年七月、一、二組合同のクラス会がありました。合同は卒業以来初めてで、会うのも学校以来という人が多く、あの人がこんなになって、という時の流れと、でもすぐに学生時代を思い出すという懐かしさが一緒になり楽しい時間でした。各々が自分の道を

歩いていると良く判りました。私は七宝焼のアクセサリーを作っています。クラフト関係の展示会では世代の違う卒業生の皮のデザイナーとも知り合いました。こんな時共通の話題があるのは嬉しいことです。

七宝焼は主に自宅での仕事ですが、一九八四年から年に数回づつスリランカに行っています。輝く土地という意味のインド洋にある北海道程の島国で、赤道に近いので正午には影がなくなるほど短くなり、マンゴー、パパイヤそしてブーゲンビリアなどが庭木で、紅茶が有名で、郊外に出れば象が家畜として力仕事をしているのも見られるかもしれない、そして、子どもたちの黒目勝ちの大きな瞳が印象的な、国民の大多数が仏教徒で信仰が日常生活に入っている、というおだやかな雰囲気のある国です。それでも近年急速に日本に似た、良くいえば近代化が進み、コロンボという中心都市には次々高層ビルが建ち、自動車と共存していた牛車が減り、道路を拡げるために巨木が切り倒されています。日本は憧れの国のひとつで、来日する人も沢山居ますが、日本人が今、後悔しつつあるような急な自然破壊などしなければ良いのにと思いつつ見ています。

そんなスリランカに幼稚園を作る協力をしています。父が大学で幼児教育の講義をしていて、そこで勉強した若いお坊さんがその仕事を始めたので、日本の、全く何の団体にも関係しない個人が集まっての仲間が現地に行ったり資金援助をしたりとつきあっています。日本の僻保育をそのまま持ち込もうとしている教育関係者も居て浸透もしていますが、我々はスリランカ人の仕事を手伝うという気持ちで、スリランカ人の生活の中でその国のために考えたり行動のできる子どもを育てる幼稚園や、またその指導のできる教師を育てるための組織作りを進めています。むこうは幼児教育の体制をこれから作ってゆくという段階なのですが、この仕事には政府も力を入れていて、訪国すると大統領にも会い、その記事や写真が新聞にでたり、テレビニュースにもという、日本ではありっこない体験もしています。現在は六〇〇〇坪の土地にゆったりした園舎が建ち、リスやカメレオンも居る草地で一〇〇人ほどの子どもたちが遊ぶ第一幼稚園が実動しています。

宿題は終わらない

山邨伸貴（17回3組）

O・ヘンリーの「20年後」を英語の授業でやった時、誰しもが我々の20年後がどうなるのか、遠眼鏡で覗くように夢みたことだろう。それから20余年を経た今、遠眼鏡を逆さから見る事になるとは、当時想像だにしなかった。

和光高校時代は七人位で徒党を組み「和光癲癇会」なるものをでっち上げ硬派を気取った。当時、基準服が私服かと問題になっていた頃で、我々は敢えてガクランを着、高歯をはくことで、幼稚なダンディズムをひけらかしていたのだろう。五月革命直前の事であったから、およそ時代錯誤的お遊びではあったが、曖昧でありつつも強烈に何かを求めながら、希求する対象の余りの不明さに自らを戯画化するしかなかったのではないかと思う。

但しその仲間達と酒を飲みながら、何かを一生懸命語りあった事だけは、その内容を忘れても強烈な記憶として残っている。

自分自身に嘘をつかず、仲間をも欺かない。時には互いを傷つけあいながら遮二無二真実を求める。これが後年、自主制作というえらくつらいドキュメンタリィ映画作りの世界に入り、今尚やっている自分自身のコアのようなものを形作ったような気がする。もちろんその後の様々な人々との出会いに恵まれたことは言うまでもないが、敢えて勉強を強いることなく、莫迦げたことをさせてくれる学校というのは和光以外にあったのだろうか。

『私達の新作「夏休みの宿題は終わらない」は英・仏の核燃料施設周辺に住む人々を、妻と息子（小四）の三人でたずね歩いて作った記録映画です。多分この拙稿が皆様のお目にとまる頃には東京での一般上映は終わっていると思いますが、いつか皆様のお膝元で上映される事がありましたら、是非ご覧いただければと念じております。』

と、ここまで書いてハタと思い至った事がある。20余年を振り返って感傷的に書き綴っていながら実は私自身、大きな嘘にはめられてきたのではないかと言う事である。

この拙文を書いているのも、映画を作り続けている事さえ、実は高校時代に怠けていた分の宿題をやらされているのにすぎないのではないか。親にとって子はいつまでも子であるように、教師にとってみても生徒はいつまでも生徒であっておかしくはない。

和光というのはひょっとすると一生宿題を負わせる学校なのかも知れない。ただひとつ高校時代と違うのは、通知表が送られてこない事だけである。

〔附記〕

今回は、三人の卒業生にお願いしてご寄稿を頂きましたが、今後、続けて、この欄を交流の場にしていきたいと思っています。ご協力をお願い致します。投稿も歓迎します。

（事務局）

はなみずき通信

号外（卒業生名簿訂正・増補一覧表）を同時に発行いたしましたが、まだ不明な方もおいでになります。ご友人の消息や誤記に気付かれた場合はご一報下さい。また、ご転居、勤務先の変更等もお知らせ願えれば幸です。いつも、最新のデータを揃えておきたいと思いますのでご協力下さい。

〔連絡先〕

〒一九四―〇一
東京都町田市真光寺町一二九一
和光高等学校同窓会
岸本博子
☎0427―34―3403